

「大学マネジメント研究会」のこれまでとこれから・欧州大学調査

蒸し暑い夏も、いくつかの強烈な台風が日本列島を駆け抜けていくうちに過ぎ去っていったようです。私の勤務する立命館アジア太平洋大学も、秋の卒業式と入学式を相次いで終え、今は世界 80 カ国からの学生の元気な姿がキャンパスに溢れています。

さて、「大学マネジメント研究会」での設立当初からホームページを設け、全国に散らばる会員の方々に、本会の活動について適時的確に情報をお伝えしようと努めてきました。本会では、いい意味でも悪い意味でも設立当初から会長を務め、また月刊誌「大学マネジメント」の編集長を務めてきた私が、大学マネジメントの現場での経験を通じて感じたこと、あるいは海外を含む様々なネットワークや国際シンポジウム参加を通じて抱いた問題意識などを色濃く反映した活動を行ってきました。しかし、当然のことですが、個人の経験には偏りも限界もあります。私もまたいずれは大学の現場から去る日が来ます。そういう意味で、本会の今後の発展と活動の広がりを見据えた方向転換が必要だと考えました。

本年度から会則の変更を行って、国立だけでなく広く私立大学、公立大学にも対象を広げたこと、国立大学の経営課題や人材育成、組織改革に関する実践事例を研究、調査、交流することに主眼を置いた活動を行ってきましたが、教学改革をも研究の対象にしたことは既に周知のことと思います。同時に役員数を増やし、副会長に私学出身の福島一政さん、理事に教員出身の ICU 鈴木典比古学長、明治学院大学大西春樹学長、企業出身の芝浦工業大学柘植綾夫学長に加わっていただいたのも、より多くの、多様な経験と知恵をお持ちの方々の意見を取り入れた運営を行っていききたいという意図の表れです。

9月初めに 10 日間ほど、大学や企業の幹部から成る調査団の団長として、英国、ベルギー、オランダ、フィンランドの大学と EU（欧州連合）を、グローバル化に対応した人材育成、就業力、大学の経営改革、高等教育政策の変化をテーマに調査して回ってきましたが、これまで中世以来の伝統に捉われて改革が遅れていると思われてきたこれらの国で、急テンポで改革が進められているとの印象を強く持ちました。詳しくは「大学マネジメント」誌で近いうちに報告したいと思いますが、こうした国々の大学に比べて、私の知る日本の多くの大学がいかにか危機感が薄く、改革の速度が遅々としているかを痛感しました。調査団には、本会の理事の西阪昇京都大学理事・副学長も参加しましたが、「欧州の大学の中には、ボトムアップとトップダウンをうまく組み合わせて改革を進めているところもある」と危機感を募らせていました。

微力ですが、本会が改革マインドをもつ大学の教職員の交流、協力、連携の場になることをいつも願いつつ、今後とも頑張りたいと考えています。なお、この「会長」ブログは、少なくとも月に 2 回は書いていきますので、時々 HP をチェックしていただくようお願いいたします。また、今回は久しぶりのブログで少し堅苦しくなりましたが、これからはいつものようにもっとヴィヴィッドに動きをお伝えするようにしたいと思います。

(2011 年 9 月 29 日、別府にて)